

F・ブリンクリーと日英博覧会

F・Brinkley and Japan-British Exhibition of 1910

博士後期課程 教養デザイン研究科 2010年度入学

澤 木 智 恵 子

SAWAKI Chieko

【論文要旨】

1910（明治43）年、ロンドンにおいて日英博覧会が開催された。徳川幕府らが1867（慶応3）年のパリ万国博覧会に出展して以来、ブリュッセル万博（1877年）を除くすべての国際博覧会に参加してきた日本にとって、43年目にして初めて主催する国際的博覧会であった。

フランシス・ブリンクリーは、パリ万博の1867年来日したイギリス陸軍士官であり、海軍省御雇を経て、英字新聞『ジャパン・メール』の社主兼主筆となり、のちにロンドン発行の『タイムズ』の東京通信員として、日本を世界で紹介しつづけたジャーナリストである。と同時に、日英同盟、不平等条約改正、日英協会に関わり、日英の架け橋ともいわれた。日英博覧会に関しても深く関与したのであるが、これまでそのことについては、記録・紹介、研究がなされていない。本稿ではブリンクリーが、日英博覧会を記念して『タイムズ』が発行した「日本特集号」のメイン・ライターとして執筆にたずさわったという事実およびその記事内容を紹介する。それを通して、明治日本と英国に対してブリンクリーが果たした役割を検証し、考察する。

【キーワード】 F・ブリンクリー、日英博覧会、日本特集号（『タイムズ』）、伊藤博文、日本美術

はじめに

フランシス・ブリンクリー（Francis Brinkley）は、1841年11月9日、アイルランドの名門の家に生まれ、ダブリン大学のダンガノン（Dungannon）、トリニティ（Trinity）の2つのカレッジで学び、数学と古典学で首席となり、卒業後はロンドン南東部の街ウーリッチ（Woolwich）にある王立陸軍士官学校（The Royal Military Academy）に通い、陸軍砲兵隊へ入隊する。1867（慶応3）年に従兄である香港総督リチャード・マクドネル卿（Sir Richard Macdonnell）の副官として

来日。4年後の1871年にイギリス陸軍を辞めて日本の海軍省の御雇となり、海軍砲術学校において砲術と数学を6年間教え、1878（明治11）年から2年間、工部大学校の数学教授をつとめる。1881（明治14）年、横浜居留地発行の英字新聞『ジャパン・メール（*The Japan Maile*）』の経営・編集権を取得し、1895（明治28）年、『タイムズ（*The Times*）』の東京通信員に就く。日本に強く魅せられ、1912（大正元）年10月28日に亡くなるまでの45年間、一度も母国に帰ることなく、東京に没する。享年70歳11か月。水戸藩士の娘、田中安子と結婚し、二男二女をもうけた⁽¹⁾。

(1) 日本語の習熟と国際外交での活躍

プリnkリーは来日直後から日本語の習得に打ち込み、日本語力において右に出る者はいないといわれるほどに力をつけた。この語学力が日本における活動の核になったといっても過言ではない。御雇外国人やジャーナリストとしての仕事の傍、『語學獨案内⁽²⁾』、『和英大辭典⁽³⁾』など辞書や、『日本と中国：歴史、美術と文学⁽⁴⁾』（全12巻）、『日本民族史⁽⁵⁾』など日本についての多くの著作を執筆・編集した。『ブリタニカ大百科事典⁽⁶⁾』9版の「日本」の項（第29巻）も彼の執筆による。さらに日本美術研究者として優れた美術評論⁽⁷⁾を残したのも、日本語力によるところ大である。

日本語を巧みに操るプリnkリーは⁽⁸⁾、西洋の事情に通じる知恵袋として頼られ、政財界の大物との太いパイプラインをもつ、いわば日本の権力中枢の情報を知る人物であった。歴史の表舞台には登場しないが、明治政府の国際外交の影のアドバイザーとして重用された。条約改正をすすめる日本を後援し⁽⁹⁾、日英同盟に関しては、「日本の政治関係者によれば、日英同盟を可能にしたのは、キャプテン・プリnkリーの功績⁽¹⁰⁾だったといわれている。そして、その話は決して信憑性のないものではない⁽¹¹⁾」と追悼記事に書かれるはたらきぶりであった。

伊藤博文はじめ元老たちからの信頼があつく、天津条約締結の際には伊藤に同行して北京まで赴いている⁽¹²⁾。また、「外務省の陸奥宗光と親交があり、友人に外務省関係の人が多かったため、当時の外務省の書類の英訳の大部分をプリnkリーが担当したという⁽¹³⁾」ほど、日本の統治機構の内部に踏み入っていた。開国して間がなく、国際社会に暗い明治政府にとって、出自・経歴・人脈いざれも非の打ちどころのないプリnkリーは、格好の外交の助っ人であった。

また、日英協会⁽¹⁴⁾の創立メンバーとしても尽力し、1911年から1年間、副議長をつとめている。創立記念祝賀会においてプリnkリーが祝辞をのべたことが、同年11月8日付『東京朝日新聞』（p.4）記事「英國協會成立」の中で、「キャプテン・プリnkリー氏は英國協會の設立を祝し、林伯之を答辞せり」と報道された。林伯とは、1902年にロンドンにおいて日英同盟の調印をした駐英公使、林董伯爵である。プリnkリーの人脈は日英にわたり一流揃いであった。プリnkリーの華やかな経歴と、日本最良の言動は明治時代のマスコミ界にもてはやされる。新聞でたびたび報道され、顔写真も掲載される有名在日外国人であった。しかし、死後はマスコミ報道から名前が消え、同時代の来日外国人ベルツ⁽¹⁵⁾やラフカディオ・ハーン⁽¹⁶⁾のように話題になることはなかった。現在では、一部の研究者に知られるにすぎず、研究分野においてもはかばかしい進歩がみられない。

(2) プリンクリーについての先行研究と日英博覧会

プリンクリーに関するもっとも早い研究論文は、没後20年経った1932（昭和7）年発行の蛭原八郎著『ジャパン・メイル』とプリンクリー⁶⁷⁾である。蛭原は2年後の1934年に「プリンクリーの死—附、デニングの死⁶⁸⁾」も発表している。次いで、1940（昭和15）年に山本美保子著「フランス・プリンクリ⁶⁹⁾」、山本と五十嵐睦子の共著の1959（昭和34）年刊「F・プリンクリ⁷⁰⁾」とつづく。蛭原から山本・五十嵐までの32年間に、たった4本の論文しか書かれていない。これ以降、20本を越える研究著作が登場するが、10年の間があくなど、日本人のプリンクリーに対する関心の低さを感じられる。そして、彼に関する研究著作のすべてにおいて日英博覧会との関係性がいっさい記述されていない。その理由を鑑みるに、前述の早期の研究論文がこの件にふれていないからではないかと推測される。ことに詳伝である五十嵐睦子・山本美保子（1959）は、その後のプリンクリーに関する著作に引用されつづけ、経歴に関して引用を超える内容が書かれた出版物を目にしたことがない。すなわち、五十嵐・山本（1959）以降に出版されたプリンクリー関連の著作物には、新たなる調査研究の形跡が見当たらない。

さらに、蛭原、五十嵐・山本らが書き、現在に伝わるプリンクリーの経歴の出典は、主としてプリンクリー死亡時の英字新聞各紙の訃報記事⁷¹⁾に拠っているが、それらの新聞も日英博覧会との関わりを報じていない。歴史に「もし」はないといわれるが、英字新聞のいずれかに、あるいは早期の研究論文の年譜の項に「日英博覧会記念・『タイムズ（日本特集号）』で執筆」と記載されていたら、後日のプリンクリーおよび明治日本の研究に少なからぬ影響を与えたであろうと思われる。

I 日英博覧会と『タイムズ（日本特集号）』

近年、日英博覧会はほとんど知られていないが、明治政府が同博を開催するに至った目的・事情とその成果、日本にもたらした影響とはどのようなものであったのだろうか。

(1) 開催の経緯から評価まで

日本初参加の国際博覧会⁷²⁾である1867（慶応3）年の第2回パリ万博は、徳川幕府とは別ルートで薩摩、佐賀の両藩も“独立政府”として出展し、連邦国のような印象を世界に与えた。名実ともに日本が一国として参加したのは明治政府になって6年目のウィーン万博（1873年）であった。

明治政府の富国政策であった国際博覧会への参加が15回を数えた頃、日本国内における万博開催を望む声が政府内に高まる。日本は30年以上も参加しているものの主催側に立ったことはない。日清・日露戦争で小国日本が大国清とロシアに勝利して、一等国の仲間入りを果たすと自負する明治政府が、国力を世界に誇示するイベントとして世界規模の博覧会⁷³⁾を望んだとき、軌を一にして日英博覧会（Japan—British Exhibition）の企画が持ち込まれた。持ち込んだのは、イムレ・キラルフィー（Imre Kiralfy）というユダヤ系ハンガリー移民で企業家の、イギリスにおける最も有力な博覧会興行主のひとりである。1908年にロンドン近郊のシェパーズ・ブッシュのホワイ

ト・シティで英仏博覧会を開いて大成功を取めた彼は、英仏博覧会場跡地19万坪と建造物をそのまま利用して日英博覧会開催を企画し、駐英大使の小村寿太郎に打診した。小村は、欧米の黄禍論や反日感情をやわらげ、日本の真の姿を広める契機になり、民間の親睦と日英外交関係の強化にもなると考え、さっそく開催意義を日本政府へ伝える。博覧会は農商務省所管の事業であるため、日英の通商貿易の推進という開催目的も加えて⁶⁴⁾、1909年3月21日に日本政府側とグレート・ホワイト・シティ当局との間で、日英共同博覧会開催に関する正式の調印が行われた⁶⁵⁾。

万国博覧会ではないが、西欧列強の雄であり、同盟国⁶⁶⁾であるイギリスとの共同主催の博覧会は、日本を世界にアピールする絶好の機会となる。一参加国では、他の国とのかねあいから展示区画が期待通りにならないこともあったが、主催国であればそんな苦慮もなく、日本を十分に紹介することができる。こうして日英博覧会は、ロンドンのホワイト・シティにおいて開催されることになった。「日英」と冠されているが、実質はロンドンおける「日本博覧会」であった。イギリス政府は教育部と陸海軍に関する分野のみの出品であった⁶⁷⁾。この状況を、読売新聞（1910年8月1日、p.2）がドイツの新聞記事を紹介する形で報じている。

●獨紙の日英博観

獨紙のテグリツヒエ、ルンドシヤウは日英博覧会を評して、英国部に陳列されたる商品の如きは第三級の品目にて、而かも開会当時の如きは到る処空虚なりしも、英国諸新聞は黙して之を云はず、公衆の注意は日本館のみに集中し日本国民の勉強を驚嘆せざるものなしと論じたり。

展示スペースの規模、投じた金額において日本は英国をはるかにしのいでいた。展示スペースでは、英国は3分の1、日本の予算金額は180万円（のちに28万円追加）⁶⁸⁾。一方、イギリス政府は日英博覧会協賛の要請に「英国政府は、如斯企画に対し補助金を与えたる先例なし」と、「如斯企画」すなわち博覧会に補助金を出すことはなかった⁶⁹⁾。これはイギリスの実質の主権者キラルフィーと日本政府との契約であったことを示している。とはいうものの名誉総裁にイギリスはコンノート公アーサー殿下（Prince Arthur of Connaught）、日本は伏見宮^{さだなる}貞愛親王がそれぞれ就任し、両国の親睦がはかられた。こうした日英両国の同博にかける意識・意欲の違いや、明治政府の西洋先進国を追随する植民地展示⁶⁰⁾などが評価を下げ、のちにマスコミや有識者から日英博覧会は失敗だったと酷評される。とはいえ美術工芸品や造園などの展示は好評で、日本文化に対するイギリス人の認識を改めさせる成果をえた。『タイムズ』が日本特集号を発行した目的の中には、日英博覧会開催を、英国国民に日本に対する理解を深める絶好の機会ととらえる視点があつた。さまざまな批判はあつたものの、日本人の美意識が評価されたことからすれば、目的は達成されたといえるだろう。

(2) 日英博覧会の先行研究・著作

日英博覧会に関するもっとも古い文献は、朝日新聞特派員として派遣された長谷川如是閑の書い

た日英博覧会視察記である。朝日新聞社では日英博覧会見物を組み込んだ85日間世界一周旅行を企画し、その報告書として『欧米遊覧記第二回世界一周⁶¹⁾』を刊行した。同書の巻末 (pp.509-553) に付録として如是閑の視察記「日英博覧会」が掲載された。付録とはいえ44頁もさいて開会次第に始まり会場の構成、出品物、余興の数々、日英の展示館の景況比較など一部始終を載せている。また、台湾、アイヌなどの村落を再現、実際に生活させてみせた東洋館を「日本殖民館⁶²⁾」と称するなど鋭い文明批判も展開する。だが、開会式に合わせてロンドンに入り、21日間の滞在だった如是閑の文に『タイムズ』の日本特集号の件はない。おそらく帰国後に読んでいるであろうと推測されるものの定かではない。また、近年、日英博覧会に関する優れた研究論文（後掲・文献1）が発表されているが、『タイムズ』の日本特集号を取り上げたものは一つもなく、当然ながらプリンクラーについての論考も見当たらない。

II プリンクラーと『タイムズ（日本特集号）』

日英博覧会開催（5月14日—10月29日）を記念してロンドン発行の『タイムズ』が7月19日に発行した日本特集号は、当時もっとも日本に精通していると定評のあったタイムズ東京通信員を中心に、日本に詳しい優秀な記者を特派員として日本に派遣、さらには各界の当代一流の専門家に寄稿を依頼し、現代（明治）日本を表現しようとしたもので、発行主旨が次のように記されている。

この号の主目的は、今ロンドンの日英博覧会（Japan—British Exhibition）が日本の事物に対する大衆の関心を刺激しつつあるのを機に日本に対するわが同胞の認識を高めることにある。（略）日本人の生活には、当然のことながら、イギリスの大衆がほとんど知らない側面が多々ある。（略）もし平均的イギリス人が、日本人のことをどう思っているか言ってくれ、と求められたなら、彼の返事はおそらく数語に要約できるだろう——戦士としてはすばらしいが、仕事の相手としてはいただけない⁶³⁾。

「戦士としてはすばらしい」とは、小国日本が日清・日露戦争で二大国に勝利した勇敢さへの称賛であり、「仕事の相手としてはいただけない」は商取引パートナーとしては信用されていなかったことを物語っている⁶⁴⁾。『タイムズ』の記事は、イギリス人のこのような日本人観が、理解不足や誤解、先入観から生じているのではないかと言外ににおわせた後、日本人についての見解を展開する。文化や歴史の異なる西洋人的感性ではとらえきれない日本人の性格の複雑さ、行動の多様性や生活の多面性、発明の才、完璧な専門技術、侍精神を現代的な戦艦や軍団への転換に駆使する芸術的な気質などについて説明する。そして、「西洋の影響は大きくなっている。日本の社会生活全体は依然として過渡期状態にあり、その行く末はまだ見えない」としながら、そうした現代日本を、どう理解し解釈するか、未来はどんな答えを出すか、と読者へ問いかける。日英同盟にむすばれるイギリスと日本の親交は、お互いの国への正しい理解から生まれるのは理の当然だが、そのた

めに今もっとも必要不可欠な特集号であるというわけである。日本特集号は、読み物頁と、現代日本の社会状況や風景を写真で説明するグラフィック頁とで編集され、合わせて71頁の読み応えある内容である。読み物頁では、現代日本の政治・経済・歴史・教育・文化・芸術・都市・日本人の特質など、日本を総体的にとりあげて論じており、ここにプリンクリーが筆をとっている。ただし、彼の名前は書かれていない⁶⁹。筆者名は「本誌東京通信員 (our Tokyo correspondent)」である。1910年当時、『タイムズ』の東京通信員はF・プリンクリーであった。

(1) タイムズ東京通信員・プリンクリー

F・プリンクリーがタイムズ東京通信員に就任したのは1893（明治26）年⁶⁹である。前任者で日本初のタイムズ通信員、ヘンリー・スペンサー・パーマー（Henry Spencer Palmer）⁶⁷の死後を引き継ぎ、以来、20年間にわたって、日本発の記事をロンドンに送り続けた。

当時、神戸居留地で発行されていた『ジャパン・クロニクル（*The Japan Chronicle*）』の1912年10月30日号（p.5）によれば、政治関係の『タイムズ』への寄稿文は、前任者パーマーの生前からプリンクリーが書いており、パーマーは名目上の筆者でしかなかったという。「これは衆知の事実であり、実際、数年後に出版されたパーマーの著作集から除外されている」と同紙は伝える。また同紙は、プリンクリーの記事が日本に対する英国世論の形成に貢献したと次のようにふれている。

キャプテン・プリンクリーは、特に二つの大戦に関して、英国内で日本への好意的な感情を形成するうえで、タイムズ通信員として多大な貢献をした。（略）寄稿文はいつも非常に読みやすく、また、とても熱心に擁護していた日本政府に対する賛意を述べるうえで、プリンクリーは優れた技術を発揮していた。

プリンクリーの日本最良はつとに知られていた。このことについては客観性を身上とする報道にあって、偏りが生じ好ましくないという非難も少なからずあった。しかし、プリンクリーの発信する日本の情報と見識に対する『タイムズ』の信頼はあつく、亡くなるまで東京通信員を代えることはなかった⁶⁸。ところで、『タイムズ』の日本特集号との関わりにおいて、プリンクリーの名前が浮上するのは、1910年4月11日付『東京朝日新聞』（p.3）の記事である。題名は「タイムズ「日本号」（材料はほゞ纏まる）」。プリンクリーは次のように紹介される。

記事欄には先ず社説あり。日本と英国との関係、日本と欧州との外交関係等を詳論す。之に次いで大隈伯爵の寄稿にかゝる序論を掲ぐべし、その他の記事の大部分は四十三年間日本に留まつて日本内外上下の事情に精通せるプリンクレー氏及三十余年英米両国において統計の業に従い経済学及統計の大家を以て容されたポーター氏⁶⁸、其他の日本各方面の大家の寄稿に成り、日本に関する一切の事物に渉りて一も洩らす所なからんことを期するといふ。プリンクレー氏の

十数篇中には日本の歴史皇室の事より始めて日本の東洋に於ける勢力、日本の政治経済工芸の現状に及び、別に氏が實見したる日本人の特質及日本の大政治家のスケッチ、帝国議会の模様など、悉く雄渾円熟なる氏が筆に上るべし。

「四十三年間日本に留まつて日本内外上下の事情に精通せるプリンクレイ氏」と書かれているが、彼は1867（慶応3）年来日し、1910（明治43）年まで、まさに43年間を日本に居住していた。そして、日英博覧会の2年後に東京の自宅で死去する。明治時代45年をまるごと人生に収めての終焉であった。『タイムズ』の日本特集号における唯一の匿名の寄稿である「日本人の特質（Japanese Characteristics）」という題名の筆者は、「在日43年のある居住者（a 43years resident in Japan）」と記されているが、この執筆者はプリンクレイであると断定してよいだろう。

(2) 『タイムズ（日本特集号）』の構成と内容

1910年7月19日付『タイムズ』に掲載された日本特集号の構成と内容をみてみよう。

日本特集号は、『タイムズ』の25～96頁を占めているが、序文に相当する「日本の発展（The Progress of Japan）」だけは13頁に掲載されており、これを加えれば全73頁にわたり、編集部的气氛込みが感じられる本格的な日本紹介の特集である。東洋的な写真が多数、しかも大きく使われている魅力的なグラフィック紙面もあって、日本への興味をそそる構成になっている。

序文「日本の発展」は、現代日本の現況と、それまでの日本の歩み、および本紙特集号の内容に関しての概略と執筆者の紹介を行っている。そして日本特集（Special on Japan）は、日本地図を大きくあしらった扉（p.25）からはじまる。次の26～48頁までは、写真・絵・図表らと文章を組み合わせ、視覚効果をもちいて読者の関心と理解を促そうと狙っている。つづく49～72頁が日本に関する記事（Articles on Japan）で、通信員、特派員と各分野の専門家による署名記事が掲載される。24頁にわたる記事の巻頭には、タイムズ社内記者による「新旧日本（Old and New Japan）」（p.49）。内容は、タイトルで想像されるような明治維新以前と以後、封建時代と近代文明の比較ではなく、鎖国以後、西洋文明に触れてはじまった新生日本の現状と問題点、将来展望の期待と見解を示す記事である。世界における日本についての西洋人側からの見方が興味深い。

たとえば19世紀世界史における最大の事件は、ペリー来航から始まった日本の鎖国解除であるとし、「それを契機に東洋の一国が、自国の文化を全く放棄せずに西洋文明を大いに同化できることを歴史上初めて証明し、和平技術でも戦争技術でも西洋の大国と対等の資格で肩を並べる権利を主張するなど、自国の力量に目覚めることによって西洋・東洋の関係に完全なる変革をもたらしたからだ⁽⁴⁾」と評価する。他の大事件⁽⁴⁾に関しては、「西洋文明の支配的影響下での世界史の発展にさらなる段階をしるしたに過ぎない」と一蹴。そして、日本開国の意義を次のように記す。

日本の浮上、中世的封建国家から西洋文明のあらゆる物質的手段を備えた近代国家への同国の

驚異的急変身、陸海における同国の戦果、そして同国が通商・産業分野であげてきたそれほど華々しくはないが、かなり実のある業績は初めてこんな疑問を提起した—白人至上主義はこれまで考えられてきたように疑問の余地のないものなのか。

『タイムズ』は日本の開国を、西欧の白人社会の価値観を一変させた画期的な出来事であったという。西洋世界史へのこのような日本登場の驚きを、西洋人は「アジアの目覚め」と呼び、「その意義は未来的においおい明らかになっていくだろう」と論評する。

このあと、大隈重信伯爵の寄稿文「日本帝国 (The Japanese Empire)」と、タイムズ記者の「イギリスと日本 (Great Britain and Japan)」があり、つづいて「本紙東京通信員記事」、すなわちプリンクリーの書いた記事と、特派員ポーターの記事が掲載される。

(3) プリンクリーが書いた記事

「本紙東京通信員記事」と記されたプリンクリーによる記事は次の9本である。

- ① 王朝—元首および皇室 (The Dynasty : the Sovereign and the Imperial Family) p.50⁽⁴⁾
- ② 議会制度—国会の機能 (Parliamentary Institutions : The Work of The Diet) p.51
- ③ 元老たち—回顧 (The Elder Statesmen : a Retrospect) p.51
- ④ 故伊藤公爵の回想録 (Reminiscences of the Late Prince Ito) p.51
- ⑤ 新世代の政治家たち (The New Generation of Statesmen) p.51
- ⑥ 日本経済—明治時代の財政状態の概観—金本位制 (Japanese Economic : Review of Finance during The Meiji Era, The Gold Standard) p.55
- ⑦ 美術と工芸—世襲の集団 (Arts and Crafts—hereditary corporations) p.56
- ⑧ 東京という都市 (The City of Tokyo) p.58
- ⑨ 現代の韓国—日韓関係の五つの段階 (Modern Korea—Five Phases Japan's Relation with Korea) p.60

これらに加え、「在日43年のある居住者」が書いた「日本人の特質 (Japanese Characteristics)」(p.66) と、ほかに「通信員 (a correspondent)」の記事と記された3本のうち、「慈善事業 (Charitable Undertakings)」(p.70) と「女性の仕事 (Woman's Work)」(p.72) の2本はプリンクリーの筆によると推測される。ともにプリンクリーが深い関心を寄せていたテーマであり、歴史に長けて史実に材を求め、優れた著書からの引用を積極的におこなうプリンクリーの執筆傾向がみられるからである。さらに慈善に関しては、本人は口外するのを嫌がっていたから表面化しなかっただけで、じつは熱心な慈善活動家であったと友人が次のように証言している。

キャプテン・プリンクリーの人生は、家族とごく親しい少数の友人だけが知っている慈善行為

に満ちていたと言っても過言ではない。彼ほど優しい心をもった男はいなかった。生前、彼の慈善行為について口外するのは彼の望まないことだった。したがって、彼が死んでしまった今ではなおさらに、口外することはできない。彼は人々に金銭的な援助をよくしただけではなく、しばしば金銭以上に価値あるもの、すなわち時宜を得た助言をよく与えていた⁴³⁾。

女性に関しては開明的であったという逸話もある。当時の西欧諸国は植民地や文明後進国の女性との結婚を認めなかった。たとえば、英国公使、アーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow) は日本女性、武田おかねを妻としていた。日本では周知のことであったが、おかねの存在は、「彼の外交官経歴のどの段階においても、公的に認知されていない」という。「彼の場合、日本人妻のことが公になっていたら、彼が外交官としての選ばれた人生を続けることは考えられなかったであろう⁴⁴⁾。これが先進国西洋の社会通念であった。サトウの伝記作家 B・M・アレンは、サトウの結婚には一切触れていない。なぜか。サトウは結婚しなかったのである⁴⁵⁾。

現地妻という偏見にもとづく結婚の壁を崩したのがプリンクレーであった。英国法院に訴えて12年間も粘り強く裁判を続け、ついに妻と子供の英国籍入籍を勝ちとっている⁴⁶⁾。女性を巡る問題へのこのようなこだわりを考えると、プリンクレーが女性論を論じても少しもおかしくない。

また、先の『東京朝日新聞』の記事中に「プリンクレー氏の十数篇中」とあったが、「本紙東京通信員」による記事9本に、「在日43年のある居住者」による記事1本、プリンクレー執筆として明らかなのは、合わせて10本である。ただし、これに“慈善”と“女性の仕事”の記事を合わせれば12本になり、朝日の記事「十数篇」と数が合うのである。

『タイムズ』は日本特集号の序文「日本の発展 (The Progress of Japan)⁴⁷⁾」で、本紙東京通信員と「在日43年のある居住者」、すなわちプリンクレーが書いた記事を次のよう評論している。

本紙東京通信員によるシリーズ記事は格別の重要性と価値を持っている。おそらくサー・アーネスト・サトウは別としても、現存するイギリス人で同通信員ほど日本の現代史に通暁している者はまずあるまい。いや、サー・アーネスト・サトウといえども本紙通信員が巡り合ってきたような情勢の進展を継続的に、また綿密に経験はしてまい。同通信員は日本改造を目指し、ときにはそれに加わってきた。彼は皇帝の人柄と日常生活を確かな筆で描き、イギリスではほとんど知られていない議会制度（中には現在廃止されているものもある）の独特な発展について述べ、元老と新世代の行政官について、彼らの間で生活し働いてきた者の視点から論じ、正確な知識を駆使しつつ日本経済について記している。故伊藤公爵に関する同通信員の懐旧談は40年に及ぶ親交の思い出から引き出されたものだ。また、日本の芸術と工芸に関する彼の記事には、世に認められた文句なしの権威者の見解が持つ重みを感じられる。(中略)

「在日43年のある居住者」による日本人の性格の評価は、普通の旅行者の目には必ずしも留

まらない日本人の特性の新鮮な魅力ある肖像画となっている。この記事の要所は、日本人の性格を十分に理解するには日本語の理解が不可欠である、という部分にあると思われるが、日本語をものにするには10年はかかるという。

著名なアーネスト・サトウに伍して書かれているどころか、サトウ以上の高評価をし、「在日43年」のところでは、日本語に習熟していることにふれ、通り一辺の日本通ではないことを強調する。掲載した新聞社としての自信と誇りさえうかがわせる内容である。プリンクリーの記事は日本寄り過ぎると、ジャーナリストとしての偏向を批判されても、彼が死去するまで東京通信員として契約を切らなかった『タイムズ』の意思がこの文章に感じとれる⁽⁴⁸⁾。

III プリンクリーの日本人観

プリンクリーが担当した12本の記事のテーマは、皇室、政治・経済から、日韓関係、首都東京、美術工芸、日本人の性格、慈善活動、女性の仕事と多岐にわたる。すべてに共通しているのは、26歳で幕末日本に上陸し、日英博覧会の年には69歳になっていたプリンクリーの見聞と見識を軸に展開していることである。それは、封建時代の日本の土を踏んだ一人の西洋人が、近代化すなわち西洋化への国づくりの完成を見届けた時期の、43年間の総決算ともいえる内容になっている⁽⁴⁹⁾。

(1) 適応のはやさ、順応のスムーズさ

激動の時代の証言として、街の様相の激変を伝える「東京という都市」はなかでもシンボリックな記事である。「天然の要塞の地⁽⁵⁰⁾」江戸は、参勤交代で滞在する大名の暮らす藩邸が妍を競って豪邸を建て庭園を造り、たくさんの美しい風景をもつ町であったが、王政復古により藩は消滅し、藩邸は破壊され、その地域を荒廃させた。「破壊されなかった1867年に江戸を訪れた人は、たくさんの建物で覆われた首都を、刀をさした武士がのしのしと音を響かせながら歩く大通りを見たであろう」と書き、その5年後に同じ町を訪れた人は、「東京市民にはあまりにも広過ぎる町という印象を抱いたことだろう。町は点在し、多くの場所は無人となり、墮落と荒廃の様相をなしていた」と観察している。そして、38年経った。「今日の東京は、まったく異なっている」と活気あふれる街の姿を描写する。木造家屋、倉庫、煉瓦の建物、露天商が軒を連ね、外国風製品と日本製の工芸品が店に並ぶ。また、「工場に煙突が立ち、江戸を覆っていた素晴らしくきれいな空気が汚れはじめています」と近代化の弊害にも着目する。だが、治安がよく、公衆衛生が遵守され、道路は管理され、学校は財政的によく援助されている。便利な港がないことと、下水道の未整備を除けば、25年前に構想された都市計画は完成に向かい、「過去20年間にわたって桜が植えつづけられた東京は、桜の都と呼ばれるだろう」と期待を込めて結んでいる。

一方、高貴な人々も例外ではなく、禁裏において激変の波にさらされていた。「王朝」では王政復古後の天皇と宮中の変化が描かれる。

プリングリーは、明治天皇に拝謁する機会が少なくなかったという記録がある。天皇が初めて外国の代表者に謁見した1868（明治元）年、彼は英国公使サー・ハリー・パークスに随伴して宮城に参内した⁶⁰。このときの天皇の印象を「王朝」に、「人間というよりも人体模型を思わせるような不動の姿勢を終始一貫して保っていた」と書いている。その後の拝謁は海軍省御雇の契約満了時の1897（明治10）年10月の公文書にみられる。プリングリーの勤務を慰労して謁見と勅語を賜りたいという海軍省の上請書に対し、宮内省は「来たる十月三十日午後二時三十分内謁見被仰付候條、仰被る出候此段申進候なり」と承諾した⁶¹。さらに二男ジャック・プリングリーは雑誌に「何かあると父は明治大帝にお答えすべく御下問所へ出かけて行った。（略）御下問所では大概、時の総理大臣、外務大臣と父の三人で、ほかの人が加わったことは稀であったと聞いた」と明かす⁶²。

さて、初めての外国人謁見後、宮廷の儀式は急速に西洋の習慣に合致するように改められ、外国の来訪者の謁見や軍隊の観兵式、晩餐会、園遊会などが催されるようになった。すると、「そのような儀式をそれほどこなさぬうちに生き生きとして人好きのするホストに変わっていった」と天皇の様子が一変する。古風な和式の習俗から西洋式への適応のはやさにプリングリーは驚かされた。その理由を「14歳での天皇即位という若さ」にあると分析している。

封建社会から近代社会への短期間の移行と、それに伴う生活の変化への優れた対応力は、日本列島を襲う台風・地震・津波・火山爆発などの自然環境と無縁ではないと思われる。多発する災害を乗り越えることで培われた面が多分にあるのではないだろうか。天皇から庶民まで例外なく生活が激変した時代の様相を間近に見聞きしたプリングリーは、日本人の特性である優れた適応・順応の能力に目を瞠った。その理由が、風土に根ざしていることまでは言及していないが、この記事では、日本人のたくましい復興精神をしっかりと感じとっていたことがうかがえる。

また、プリングリーは、急激な西洋化が進む一方、宮殿が神道に則った簡素な建物であるのは「国民のために礼拝することが君主の大事な仕事の一つ」であり、それは「大昔から変わらない」と旧時代の慣習を守る姿や、男子相続の皇室の伝統的後継システムについても怠りなく紹介している。

（2）明治政府の混乱と伊藤博文

『タイムズ』は前述の「日本の発展」のなかに、「（プリングリーは）日本の革新を目撃し、ときにはそれに加わってきた」とレポートした。彼が手がけた記事のうち7本が、明治政府の近代国家形成への道のりを記すものである。そのレポートの概略を紹介しよう。

皇室の近代化政策を描く「王朝」。議会政治における政治闘争と、いかにも日本的な帰結を描いた「議会制度」。明治維新の雄である元老の活躍を紹介する「元老たち」。明治政府のキーパーソンであり、プリングリーと親交の深かった伊藤博文の奮闘をつづった「故伊藤公爵の回想録」。内閣総理大臣（当時）である桂太郎と、最後の元老といわれた西園寺公望が、交互に政権を担当した桂園時代の政界の様相、ならびに次世代を担う政治家の注目株について言及する「新世代の政治家た

ち」。銀行制度の導入、非兌換から兌換紙幣へ、銀本位から金本位制への移行、殖産振興と貿易の促進など多事多難に立ち向かう経済政策が語られる「日本経済」。最後に「現代の韓国」は、李氏朝鮮から大韓帝国（通称、韓国・1897-1910）への移行、3つの日韓協約と韓国統監府をおき傀儡政権となった日本がおこなった韓国統治の実情について記している。これらの記事のなかで、日本の政治と政治家について、皮肉めいた感想をのべている「議会制度」と、政治家の中でプリンクリーともっとも親しかったと思われる伊藤博文をとりあげ、日本人観を探ってみたい。

1) 独特な政治決着への皮肉

天皇は即位式の宣誓の中で憲法の制定を約束した。しかし、宣誓の立案者たちの念頭には議会制度の知識が全くなかった。「議会制度」は、そんな付け焼刃ゆえの政治の混乱を、憲法発布から国会開会にいたる政党政治家（自由党と改進黨）の対立と、議会開会後の政治闘争を経て、いかにも日本的な解決策に帰着していく件を描いている。例示すれば、「衆議院と内閣は国会内で意見を交換するのではなく、外部で見解の相互調整が行われ」「その成果を法律に具現している」と指摘。「これが政党間の口論という醜聞を回避しつつ政党の考えを実現するための日本人の直観的考案物なのかどうか、そのあたりのことは判断しがたいが、少数派にとってこれほど屈辱的なシステムはない」とプリンクリーは日本の政治に異議をとなえる。母国イギリスの例をあげ、「イギリスの議会は『野党』の敗北の苦しみは激しい討論の情緒的な魅力によって、また、意見分裂の興奮によって和らげられる。しかし、日本の場合には事実上討論もなければ意見の分裂もない」と批判。結果にいたる過程の尊重こそ人間を尊重することなのに、その視点が失われていると指摘している。

また、国会開設直後に2、3時間もつづいた大演説が失われ、少数派が完全に抑え込まれた状況を、「日本の議会は雄弁誘示の舞台ではなく、法律事務所になってしまった」と嘆き、「それにしても日本の状況は独特だ。議会制度を採り入れたのはよいが、彼らはそれを自分たちの好みに合うように改造してしまった」と、日本の政治家に対するシニカルな感想を残している。

2) 豪胆と洞察力

初対面の伊藤博文は、「貴族の称号も肩書もない、ただの若い侍にすぎなかった。がっしりした体に和服を着て、西洋風に髪を刈り、顔が輝いていた」とプリンクリーは、40年前の散髪脱刀令（明治4年公布）の直後の出合いを懐かしむ。その後、明治国家形成に関わった伊藤のさまざまな業績をたどるなかで、プリンクリーが明治政府に深く関わっていた3つの事実が明らかにされる。

ひとつは、1887（明治14）年10月、霊南坂の伊藤博文の公邸における夕食会の出来事である。会食後に伊藤、井上馨とプリンクリーだけが残り暖炉の近くに席を移す。そこで伊藤と井上が「2人が政界にいる限り実現しようと意図した政策を論議した」。その内容は、まず財政問題。なかでも非兌換券を兌換券に変更することが話し合われたことを、「霊南坂の炉辺会談の5年後に銀との交換ができるようになった」と裏付けている。次に殖産事業。最後は憲法の制定について。「二院

制の国会，最高納税者の代表制，参政権の資格，政党に対する内閣の態度，直接代表制の制度の機能を検討するために西洋へ伊藤を派遣すること，これらのすべてが話し合われた」。間近でトップ・シークレットに接したプリンクリーは助言を求められたとも，助言をしたとも書かず，「私は驚きと，信じられないほどの強い関心をもって聴いていた」と打ちあける。

2つめは1885（明治17）年3月，天津条約締結交渉の全権委任をうけた伊藤に同行し，北京へ赴いたこと。交渉相手は清国の李鴻章総督である。朝鮮に起こった甲申事変後，朝鮮をめぐる覇権争いをしていた日清両国が，事変後の事後処理と緊張緩和のための歩み寄りを図った条約締結の交渉の席で，プリンクリーは伊藤博文の人間性と剛胆さ，洞察力を見せつけられた。交渉の眼目は朝鮮からの両国の撤兵であった。李総督は駐兵を主張したが，第4回会議で撤兵を合意。だが，「撤兵後の前後措置に移ると，両者の意見はふたたび激しく対立し，交渉は決裂寸前となった⁶⁴」。対立は再派兵権についてであった。伊藤は両国の再派兵の全面禁止を提案し⁶⁵，李は朝鮮に内乱が起こった場合の鎮圧の再派兵権を主張した。お互い強硬で，伊藤がついに「清から帰国する」と言うと，李は「もう一方の国の通知なしに朝鮮半島に軍隊を派遣しないこと」という事前通告義務の条項の挿入を提案した。伊藤は，ジレンマを抱えながらも提案を認めた。プリンクリーは「独立国家に軍隊を派遣するという，非常事態を公然と規定する両国の考えに衝撃を受けた」としている。

帰国の薩摩丸に乗船したとき，伊藤は「李総督はひとときの平和は保った。しかし，戦争の種をまいた」と語り，その言葉を聞いたプリンクリーは「伊藤は，李総督以上の洞察力をもっていた」と舌を巻いた⁶⁶。そして「平和が伊藤の変わらぬ目的であったと信じている」と記している。のちのハルピン駅での伊藤博文暗殺に「朝鮮人が伊藤の目的を理解していたならば…」と述懐する無念の底には，伊藤への深い信頼があったといえる。

3つめは，初代韓国統監を辞め，枢密院議長であった伊藤博文が「満州へ最後の旅に立つ数日前の晩餐会」で，プリンクリーは伊藤の隣席にいた。プリンクリーが「西洋風の舞踊は日本社会に根付くか否か」ときくと，伊藤は「最も適したものは生き残る」と暗示的な答を返してきたという。本記事には記述されていないが，プリンクリーが出席したのは，1909年10月11日の桂太郎首相主催の晩餐会と考えられる⁶⁷。伊藤の満州出発は3日後の10月14日，汽車で大磯を出発し，下関，門司を経て16日に大連に到着。10月26日朝9時30分，ハルピン駅頭で伊藤博文は暗殺された。

プリンクリーが接した伊藤博文はどんなに困難な状況下でも不安や心配を表に出さない人物である。緊迫した天津条約の会議場でも「伊藤は自信に満ち，しかも元気な態度をとっていた」という。

「騎士道」の国からきた陸軍士官・プリンクリーが日本に魅かれた大きな理由に，「武士道」の存在がある。武士道は人の上に立つ侍の道徳律であり，侍は忠誠のためには死も恐れず，危機に瀕しても動じずに平常心で物事に対する強い精神力が求められた。農民から足軽の養子になった伊藤は上級武士への憧憬を己を研鑽する情熱に転じて，いつの間にか誰よりも武士らしい人格形成を成し遂げた⁶⁸。そんな伊藤にプリンクリーは，「（公爵は）最初から皇帝（天皇）の信頼をかちとった。彼がそれに十分値することは世界が認めることだろう」と「王朝」の記事のなかで最大級の賛辞を

捧げている。伊藤博文の忠誠心と強い精神力に、プリングリーは武士道を見ていたのかもしれない。

(3) 美術家プリングリー

明治時代、プリングリーは世界的に知られた「日本と中国の美術に関する権威であった⁶⁹⁾」。彼は卓抜した審美眼で一流の美術工芸品を蒐集し、齒に衣着せぬ鋭い美術評論を展開した。『ジャパン・タイムズ (*The Japan Times*)』は「この国に到着して以来、彼はいつも日本の美術、文学、語学の勉強に身をゆだねていた⁶⁹⁾」と熱心な研究態度を伝え、「彼の日本美術の蒐集—大英博物館にその一部が展示されている—はすばらしく、これ以上の日本の蒐集家はいないといわれた人であった。なかでも彫刻と陶磁器における彼の知識は傑出していた」と手放しで認めている。

美術家プリングリーについて論文⁶⁹⁾を書いたエレン・P・コナント (Ellen P Conant)⁶⁹⁾は、今日、アーネスト・F・フェノロサ (Ernest F Fenollosa) に比べ、プリングリーに対する評価は不当に低い、と異議を申し立てている⁶⁹⁾。コナントがその証としているのは、ボストンの J・B・ミレー社 (Millet.co) が企画・出版した日本美術・文化の叢書の執筆者がフェノロサではなく、プリングリーを起用している事実である。同書は1897年発行の『日本⁶⁹⁾』(10巻)と、1903~04年発行の『東洋叢書・日本と中国⁶⁹⁾』(12巻)の2シリーズ。前者は日本の風景、風俗、美術工芸品などの古典複製木版画を260枚貼りこんだ袋綴じ和装の豪華本であり、後者は日本(8巻)と中国(4巻)の歴史、文化、芸術、文学を紹介している。

コナントはプリングリーを、「鋭い眼識を持ち、装飾工芸、特に陶磁器に用いられる題材、意匠の原則、技法などについて深い関心を持つ洗練された人物⁶⁹⁾」と評価し、彼の実力を見込んだミレー社の起用は正しかったと評価している。

『タイムズ』の日本特集号の「日本の美術と工芸」は、同書出版6年後に書かれたものである。

プリングリーの美術論は新聞記者らしく足で書かれた。制作工房へは足を運び、河鍋暁斎の弟子になって日本画⁶⁹⁾を学び、また、見聞を広める努力を怠りない。たとえば、訪日する要人の案内兼顧問の役を頻りに引き受け、香港総督ジョージ・ボウエンが来日した際には、京都や奈良に随行し、京都では城や社寺、職人の工房など、奈良では侍従に正倉院を開けさせて見学している⁶⁹⁾。それらの成果が、日本美術の揺籃の地・奈良を代表する正倉院の記事として本書に結実している。

プリングリーは、つねに日本美術の源流である中国・朝鮮との比較の上で論考し、批評しているが、正倉院の保存の品々の出所については、「師である中国・朝鮮の作品か、教え子である日本作品かを識別するのは困難」であり、揺籃期の美術品の「主たる部分は外国人の指導力と腕前に恃んでいる」とする。唯一の例外は彫刻で、奈良の大仏を「人体の解剖上の正確さ、貴族的な概念において隣の大陸諸国よりはるかに優れている」「日本人の天才彫刻家たちは、中国や朝鮮の想像の範囲を超える美術の手腕を發揮した」と絶賛。時代を経て日本と他国の識別がつかようになって、彼は日本の美術工芸のすべての分野で「いくつかの例外を除いて中国・朝鮮に適わない」と手厳しい。例外としてあげるのは前述の彫刻以外に、室町時代以降の高蒔絵や梨地の漆製品である。

ちなみに現在、漆器の世界共通語は「ジャパン」、陶磁器が「チャイナ」であることを思えば、プリングリーの評価は的を射ていたといえよう。陶磁器に関しては、「(日本製は) 最高のものでも中国の傑作からははるか下位である」と辛辣である。定評のある古伊万里、鍋島、九谷らの焼き物より、ファイナンス焼⁶⁹⁾の京都、古薩摩を評価し、「茶道具のように地味に設計され、美術品と呼ばれることを望まなかったもの」を「最も選りすぐられた品」と注目している。

また、青銅器や漆器では茶会や徳川家の霊廟⁷⁰⁾との、織物・刺繍では能狂言との関係性にもふれ、日本人の文化と美意識の接点を描く。金工では何世紀にもわたる伝承法や家単位の制作工房と世襲制の存在とともに、繊細で精巧な技術におどろき、「日本の金工は世界一デリケートで誠実な金属細工師である」と感動を隠さない。「風景画は円山応挙、狩野元信の時代から常に中国を上回り」、土佐派と浮世絵は魅力ある活躍をしたと絵画を評価するが、現代(明治時代)の絵画は「昔の巨匠たち」の作品に適わないと嘆く。しかしながら、「オリジナルな作品制作が目立たないとしても、日本人は複製に卓越している」と技術の優秀さを示唆している。さらに、中国や朝鮮を超えた美術品として奈良と鎌倉の大仏に加え、東大寺と知恩院の梵鐘の優雅な音色、江戸城や大坂城の美しい建造物、花の匂いまでも感じさせる宗珉⁷¹⁾の赤銅の芍薬(青銅器製)をあげ、「日本人は小さいことに偉大で、大きなことに小さいと批判されるが、建物と作品群は、そのような批判にあてはまらない偉大な業績」と世界に広がる日本人観を覆すのである。

(4) 日本人の心を代弁し、西洋の偏見を正す

「日本人の特質」の冒頭は、「外国の植民地に短期間住んだ交流による、日常生活のうわべを観察した考察ではない。43年に及ぶ在日生活での交流と、完全に意見交換できる日本語の豊かなボキャブラリーを得たうえで分析・検証し、言及するものである」という自信あふれる文ではじまり、筆名を「在日43年のある居住者」とした理由が明かされる。日本語に堪能なプリングリーの、長年にわたる日本の生活と日本人との深い交流で得た、日本人観が描かれる。彼は、東洋人・日本人に対する西洋人の誤解を解き、偏見を打ち消すねらいをもって本記事を手がけたように思われる。

まず最初に「東洋人はずる賢い」という風評をとりあげる。それは日本の居留地に住む一般的な外国人商人たちの感想であり、彼らの取引相手である日本人商人が下層階級に属するためだという。「外国人社会が接触している日本人商人の一面は低水準を代表しているだけでなく、あらゆる機会を良心の呵責なく利用したがつている」と身分による人品の低さと、儲けに目がない質の悪い商人たちと接しているからだといへない。プリングリーの見聞によれば、開港当初、通商目的で居留地へ赴いた日本人は身分ある武士であり、「アングロサクソン人の一流商人たちから、当時は契約書など必要なく、日本人の言葉は證文も同然であった、と聞いている」。政治の混迷から居留地への武士の出入りが禁止されると、上流階級の日本人商人は背を向け、居留地は下級の商売人の溜まり場になってしまったというのである。

身分制階級社会の時代は、洋の東西を問わず階級によって人品に差があったことは否めない。外

国人居住者の家で働く日本人の使用人に対する不評も、下層階級の人の雇用が関係しているとプリングリーはいう。「平均的日本人は（略）高潔さや誠実さ、穏やかな物腰、思いやり」があるが、そのように使用人を称賛する外国人居住者も少なくないと解説する。すなわち、「使用人にも商人にも、善い者がいれば悪い者もあり、バランスを失ってどちらかに極端に傾けば、物事を見抜くことはできず、軽率な判断を示すことになる」と論じ、「正直さと誠意という日本人の規範は、欧米と同じく強固である」と、「東洋人はずる賢い」という評価を否定する。

次にとりあげたのは「愛国心」である。「封建領主たちと幕府の自己犠牲による」王政復古を、「前代未聞の愛国心の表明」といい、この自己犠牲的・愛国的武士道精神が、穏やかで優しく、災害などの困難にも我慢強い日本人の、「命をも惜しまない戦士としての素養」とみる。

プリングリーはまた、勉学に励む若者にも「自国の地位を高めようと夢中」な強い愛国心を見てとる。なかでも苦学生一昼間は人力車夫をして夜学に通う、どんな天候でも駆け回って号外新聞を売り食事代を稼ぎながら通学する一を書く筆勢からは彼の感動さえ伝わってくる。

つづいて「子供への深い愛情」「冷静沈着」「清潔」「礼儀正しさ」と日本人の長所をあげ、「このような優しい物腰が西洋文化の荒波や圧力を受けても永遠に残るかどうか」と心配しながらも、「人生の美しさをより際立たせ、人と人との交流の喜びを大いに高めてくれる」と称える。

最後は日清・日露戦争に勝利した日本人を「好戦的」とする批判について。「西洋諸国は、日本が東洋を主導するか、そして西洋に対立するか」と案じているが、プリングリーの答えは2つとも「イエス」である。ただし、「ほぼ3世紀間、平和を享受していた日本は、武力を携えた西洋によって開国させられ、侵略の波を食い止めるために最善の努力をはらってきた。日本の戦いは侵略を避けるためであり、他国を襲うためではない。日本が再び戦うとしたら必要に迫られたからであり、意図的な選択によるものではない」と日本に好意的だ。さらには「東洋人排斥の方針を究極まで推し進めた」西洋に対して、「日本の善意を最終的に敵意に変えてしまうのは、おそらくヨーロッパとアメリカだろう」と分析し、日本人は「度を過ぎた挑発を受けなければ決して刀を抜かない、本懐を遂げるまでは刀を鞘に収めない、これは武士道の究極の教えの一つである」と結論づける。

最後に「慈善事業」と「女性の仕事」における日本人観を紹介しよう。

「慈善事業」では、天智・文武天皇による飢饉や伝染病に備えて穀物を倉庫に常備する「義倉制度」、光明皇后による孤児や老病人、貧窮民を救う「施薬院」「悲田院」、八代将軍吉宗の享保の改革の「小石川養生所」、寛政の改革の松平定信の江戸石川島の「人足寄場」、寛政年間につくられた相互扶助組織の「町内会」、貧民家庭の子供と困窮者の救済目的の「観音講」、二宮尊徳などについて語られる。そして、キリスト教社会とは趣を異にする日本の慈善事業を、「統治者が救済活動に強い関心を持ち、人々が互いに支えあうシステムを普及させた」と日本人の組織力に着目する。

また、「女性の仕事」について、女性は家父長制度のもと、「全生涯を男性の保護監督下に置かれ」、人権をうばわれた生活を送っていると同情的である。そんななかで、本来の家庭の仕事以外に、畑

仕事、内職などで健気に家計を補助している日本女性は働き者と論じている。最近では、髪結い、芸事の師匠という伝統的な職種から、銀行や電話会社に勤め、「教師や看護婦、医者や記者、小説家にまでも活躍の場を広げている」と近代化にともなう職域の拡大と女性の進出にふれ、社会的地位や自立といった人間復興への転換期にあることをにおわせている。

おわりに

開国後、日本は鎖国による文明の遅れを一刻も早く取り戻し西欧諸国と比肩すべく、グローバルな観点に立った政策を行う。それは御雇外国人の登用であり、国際博覧会への積極的な参加である。前者では西欧先進諸国の政治・経済・医学・教育・インフラ事業など多岐にわたる知識と技術導入を目的とし、後者では国力と知名度を世界に広めて貿易促進・殖産振興を図る絶好の機会ととらえ、西洋文明の国内への取り込み〈in〉と、日本文化の西洋社会への売り込み〈out〉を同時に行った。なかでも日英博覧会は〈out〉における画期的な出来事であった。なぜなら、当時の国際的勢力で比較にならない大英帝国と共に主催国として肩を並べたのである。

この記念すべき博覧会において、『タイムズ』は日本特集号を企画し、プリンクリーを編集の中心にすえた。駐英大使であり、のちの外務大臣、小村寿太郎は日英博覧会開催を「欧米の黄禍論や反日感情を和らげ、日本の真の姿を広める契機にもなる」（本論文p.4）と考えたが、「日本の擁護者⁷³⁾」プリンクリーの書いた12本の記事は、その期待に十分応えたといえよう。また、西洋と日本の架け橋を志した彼にとっては、日英博はライフワークを世界に発信するまたとない機会となった。

明治政府は、『タイムズ』の論評（注35参照）にもかかわらず、日本特集号発行1カ月後の8月に韓国併合を強行した。翌年2月、関税自主権が完全回復し、同年7月、日英同盟を更新する。翌1912年7月30日、明治天皇が崩御し、9月13日に乃木希典夫妻が自刃により殉死した。殉死を野蛮な行為と尊する西洋社会に対し、乃木夫妻の死を“古風な武士道精神の復興”と、プリンクリーは病床から『タイムズ』に打電し、記事は9月16日号（p.6）に掲載された。この記事が、タイムズ東京通信員としての最後の仕事となった。

同年10月28日、F・プリンクリー死去。ウォルター・デニング（Walter Dening）⁷⁴⁾は、彼を「明治期の日本の業績を記録してきた偉大な人物」と悼んだ⁷⁴⁾。

〔文献〕

【文献1】日英博覧会に関する資料と研究論文

(1) 資料

- 『*The Japan British exhibition of 1910: a collection of official guidebooks and miscellaneous publications*（日英博覧会（1910）—公式史料と関連文献集成）』（監修・解説：松村昌家，エディション・シナプス発行，ユーリカ・プレス発売，2011）の4巻に、タイムズ日本特集号が復刻されている。しかし、日本特集頁以外に掲載された記事「日本の発展」は未収録。
- 『国際ニュース事典 外国語新聞に見る日本④ 1906-1915 本編 上』（毎日コミュニケーションズ，1993年），以下、『国際ニュース事典』と略す。

(2) 研究論文

- リスター＝堀田綾子（大山瑞代訳）「1910年日英博覧会の主催者たち」（イアン・ニッシュ編）『英国と日本—日英交流人物伝』博文館新社，2002年。
- 安松みゆき「展覧会を通してみる近代欧州の日本古美術に対する認識の変遷—1910「日英博覧会」と1939年「伯林日本古美術会」の比較において」、『別府大学大学院紀要 5』2003年。
- 伊藤真実子「日本大博覧会計画と日英博覧会」、『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館，2008年。
- 山路勝彦「日英博覧会と「人間動物園」」、『社会学紀要』第108号，関西学院大学，2009年。
- 楠元町子「日英博覧会と明治政府の外交戦略」、『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇』第38号，2013年。同上「日英博覧会における日本の展示」、『同上』第39号，2014年。
- 松村昌家「日英博覧会イン・ロンドン」、『大英帝国博覧会の歴史—ロンドン・マンチェスター二都物語』ミネルヴァ書房，2014年。

【文献 2】日英博覧会以外のプリンクリーに関する文献

- 五十嵐睦子・山本美保子（昭和女子大学近代文学研究所）「F・プリンクリ」、『近代文学研究叢書』第13巻。昭和女子大学光葉会，1959年。
- エレン・P・コナント（本田和美訳）『ナセル・D・ハリリ・コレクション—海を渡った日本の美術—第一巻 論文編』同朋舎出版，1995年。

〔注記〕

- (1) *The Japan Weekly Mail*, Nov. 2, 1912, p.515（※頁数は年間の通頁）。
- (2) *Guide to English Self-Taught*, 印書局，1875年。著作権をとらなかったため，日就社，文学社，集山社ら様々な出版社が勝手に出版し，7-8版まで発行。1909年に改訂版『新語學獨案内 (*New Guide to English Self-Taught*)』を三省堂書店より刊行。
- (3) *An Unabridged Japanese-English Dictionary*, (南條文雄，岩崎行親と共著) 三省堂書店，1894年。
- (4) *Japan and China; Its History, Arts and Literature, (oriental series)*, Boston and Tokyo, (J・B・Millet co.), 1901-1902.
- (5) *A History of the Japanese People: from the Earliest Times to the End of the Meiji Era, with the Collaboration of Baron Kikuchi*, New York, (The Encyclopædia Britannica), 1914.
- (6) *The Encyclopaedia Britannica*, London, (The Encyclopædia Britannica), 1911.
- (7) 「明治工芸を近代美術のしがらみから解放して考える視点というものがあられる，と気づかせてくれたのは，フランク・プリンクリーの縦横無尽な明治工芸を評価する目だった」（樋田豊次郎「豪華絢爛」を輸出せよ 明治職人の生き残り大作戦」(『芸術新潮』新潮社，1995年3月号)
- (8) 『ジャパン・メール』『ジャパン・ヘラルド』とならぶ横浜3大英字新聞の一つ、『ジャパン・ガゼット』の主筆であるウォルター・デニングは，プリンクリーの日本語力について次のように証言する。「チェンバレン教授が私に言った。日本の口語体に関わる複雑な部分について，キャプテン・プリンクリーに意見を求めたとき，いつもプリンクリーの優れた能力にびっくり仰天させられた，と。このような点についてキャプテン・プリンクリーの域に達した外国人は他にいない，というのが彼の見解だった」(*The Japan Weekly Mail*, Nov. 2, 1912, p.515)。「キャプテン」の通称をもち，「キャプテン・プリンクリー」と呼ばれた。
- (9) 『*The Governor of Hongkong (Sir George Ferguson Bown, G.C.M.G.) in Japan*』(元英国砲兵隊所属プリンクリー大尉著) 出版社，発行地，発行年は記載がないが，ハーヴァード大学ワイドナー図書館所蔵の同パンフレットには，鉛筆で「(kobe, abt 1888)，即ち「1888年頃，神戸」と走り書きがある。(略)プリンクリーはこのパンフレットの中で，日本は「東洋に積極的なヨーロッパの国にとって強力な同盟国となるか，手強い敵国となる」運命にあると強調し，1850年代に欧州列強が強制した不平等条約を早急に改正する必要があることを訴えている」(エレン・P・コナント (1995) p.149の「註47」，【文献 2】掲載)
- (10) 「彼（プリンクリー）のおかげで，日本のことが正しく本国（イギリス）に伝わったことはまちがいない。彼は日本が好感をもたれるように世論をうまく創りあげた。したがって間接的にはあるが，日英同盟への道筋をつけたといえる。完璧な相互理解と共感により両国関係が発展することにいつも一生懸命だった」

(*The Japan Times*, Oct. 29, 1912, p.8)

^① *The Japan Weekly Mail*, Nov. 2, 1912, p.515.

^② 「彼が日本を離れた唯一の機会は、伊藤公爵（当時は侯爵）の随員とともに北京へ行ったときだった。そしてキャプテン・プリングリーは、彼らの交渉成功の最初のニュースをジャパン・メールへ送ることができた」(*The Japan Weekly Mail*, Nov. 2, 1912, p.516)。『大阪朝日新聞』は「横濱なるジャパン・メール新聞の記者は遺清大使の一行に随行を許され、大使と同船にて清国へ出立したる由」(1885年3月7日, p.1)と報じた。なお、天津条約締結は1885(明治18)年4月18日。

^③ 五十嵐睦子・山本美保子(1959) p.298, 【文献2】掲載。

^④ 日英協会は1908(明治41)年11月、英国と日本の親睦を目的に「英国協会」の名前で設立。初代会長は駐日英国大使、マクドナルド卿。1923(大正12)年に「日英協会」と改名された。

^⑤ Erwin von Bälz (1849-1913)。ドイツ人医師。76年来日し東大教師、宮内庁御用掛。温泉の効能も紹介。

^⑥ Lafcadio Hearn (1850-1904)。イギリス人文学者。90年来日。日本名、小泉八雲。著書に『怪談』など。

^⑦ 『書物春秋』第18号, 書物春秋会, 1932年5月, pp.23-26。

^⑧ 『日本歐字新聞雑誌史』大誠堂, 1934年, pp.195-202。

^⑨ 「フランシス・プリングリー」, 『学苑』光葉会, 1940年12月。

^⑩ 五十嵐睦子・山本美保子(1959) pp.289-340, 【文献2】掲載。

^⑪ なかでも, *The Japan Weekly Mail*, Nov. 2, 1912, (p.515) に詳しい。

^⑫ 1928年, パリで署名された「国際博覧会条約」にもとづく, 2国以上が参加する博覧会。なお本稿【論文要旨】の「ブリッセル万博(1877年)を除くすべての国際博覧会に参加した」の記述は, 〈「主要万国博覧会関係年表」, 『外交史料に見る日本万国博覧会への道』外務省外交史料館別館展示室, 2010年〉を参照。

^⑬ 「1907(明治40)年, 明治政府は日露戦争の戦勝記念として, 1912(明治45)年に東京での「日本大博覧会」開催を決定したが, 予算と経費の増大と準備不足を理由に, 決定の翌年に5年間延期が決まり, 結局中止された」(楠元町子(2013) p.41参照。【文献1】(2)掲載)。「日本大博覧会は最初の予算1000万円。日露戦争に勝利したものの, ロシアから賠償金がとれなかったことが致命傷となって幻に終わった。1912(明治45)年3月31日廃止」(古川隆久『皇紀・万博・オリンピック—皇室ブランドと経済発展』中央公論社, 1998年, pp.29-58参照)。明治天皇死去ののち, 「日本大博覧会の予定地は, (明治)神宮へと生まれ変わった」(山口輝臣『明治神宮の出現』吉川弘文館, 2005年, p.92)

^⑭ 伊藤真実子(2008) pp.173-176参照, 【文献1】(2)掲載。

^⑮ 『日英博覧会(1910)—公式史料と関連文献集成—別冊日本語解説』pp.3-4参照【文献1】(1)。小村寿太郎は1908年8月に外務大臣に転じており, 日本側の調印は後任の駐在大使, 加藤高明が行った。

^⑯ 日英同盟締結は1902(明治35)年。1905(明治38)年と1911(明治44)年に改定。1923(大正12)年破棄。

^⑰ 伊藤真実子(2008) pp.195-196, 【文献1】(2)掲載。

^⑱ 同上, p.176。

^⑲ 同上, p.177。

^⑳ 日本はアジア初, 唯一のアジアにおける植民地宗主国だった。「日本統治下の台湾の先住民民族パイワン族とアイヌ民族の家屋を再現し寝泊まりさせ生活させた。台湾土人村(The Formosa Hamlet)とアイヌ村落(The Ainu Home)は欧米で開催された博覧会の植民地展示をまねたもので, “人間展示” “人間動物園”と称した」(山路勝彦(2009) pp.1-15参照。【文献1】(2)掲載)

^㉑ 西村時彦著作, 朝日新聞合資会社発行, 1910年。

^㉒ 植民地の人と生活を再現する展示はのちに「人間動物園」として非難される。この展示を含め, 裸の相撲や貧村の生活が実演され, 当時のロンドン在住の日本人から国辱ものと悪評が高かった。

^㉓ 『国際ニュース事典』p.297, 【文献1】(1)掲載。

^㉔ 楠元町子(2014) p.29参照, 【文献1】(2)掲載。

^㉕ 『タイムズ(日本特集号)』にプリングリーの名が記載されないのは, 社内記者や契約記者など新聞社内部の手による記事には署名を入れない慣例からと推測される。たとえば同号には, 日本政府の韓国(大韓帝国)政策に対する論評「日本のためにを思えば韓国の併合—間近に迫っていると一般に見られている—は時期尚早

なのではないか」（『新旧日本』p.49）が載っているが、署名はない。優れた記事であっても社内の執筆原稿は無記名が原則と思われる。しかし、通信員、特派員など特別な任務をになう記者の記事は名前は明記されないものの、その身分は「通信員記事（from a correspondent）」といったように記載されている。

- ⁶⁹ 『WHO'S WHO（英国紳士録）』1912年版の「BRINKLEY, Captain Frank」の項。
- ⁷⁰ 英国人の土木技師で御雇外国人（1838-1893）。1882年初来日、1885年再来日し横浜水道工事顧問として着任。大阪・函館・東京・神戸の水道計画、横浜築港計画をたてた。日本で死去。
- ⁷¹ 英国公使アーネスト・サトウ（1843-1929）の1900年3月5日の日記には、タイムズ編集長、バレンタイン・チロルとプリンクリーについて論じた言葉が残されている。「（プリンクリーが）日本寄りであることは確かだか、この問題をチロルと話し合ったとき、彼こそ日本を知悉している点において、タイムズの特派員として資格のある唯一の人物であり、彼の日本寄りの傾向を知っての上でその文章を読む限りにおいて、何ら問題はないと意見を述べた。そして彼がある事件の日本政府側の解釈、例えば昨年夏の清国使節の件を新聞に書いたときでも、タイムズ紙には実際の事実を書き送っているのだと言った」『アーネスト・サトウ公使日記Ⅱ』（長岡祥三・福永郁雄訳、新人物往来社、1991年、p.352）。
- ⁷² ロバート・バージル・ポーター。『タイムズ』のワシントン通信員を長くつとめ、日本特集号の特派員として派遣された。同号のプリンクリーと並ぶメイン・ライターで、16本の記事を執筆。
- ⁷³ 『国際ニュース事典』p.296, 【文献1】(1) 掲載。
- ⁷⁴ 『タイムズ』は、「前世紀（19世紀）初頭のナポレオン帝国の崩壊、前世紀後半のドイツの権勢の増大とイタリアの統一、クリミア戦争、アメリカの発展、イギリス自治領の拡大、暗黒大陸アフリカの開発」などをあげる。「それらはすべて、この地球の人口を構成するその他のあらゆる人種を見下しながら数的には劣勢の白人人種が何世紀にもわたって享受してきた（略）優勢を確認する役に立っただけなのだ」と言及する。（『国際ニュース事典』p.296, 【文献1】(1) 掲載）
- ⁷⁵ 頁数は、『タイムズ（日本特集号）』に掲載された頁、以下同様。
- ⁷⁶ *The Japan Chronicle*, Oct. 30, 1912, p.5.
- ⁷⁷ オリーヴ・チェックランド（杉山忠平・玉置紀夫訳）『明治日本とイギリス』法政大学出版局、1996年、p.128。
- ⁷⁸ 同上、p.345の「註・59」参照。
- ⁷⁹ 葎本伊都子『国際結婚の誕生—〈文明国日本〉への道』新曜社、2001年。
- ⁸⁰ 『国際ニュース事典』p.294, 【文献1】(1) 掲載。
- ⁸¹ 徳富蘇峰（号「門外漢」）は、プリンクリーが日本寄りであることに関して次のように書いた。「彼は善くも自己の立場を選べり。そは日本に在るからには、日本の友人たることが、第一の先務なりてふ一事是のみ。斯くて彼と日本とは、互ひに相得たり。日本も彼を信じ、彼も日本を信じ、而して『タイムズ』は、彼において比較的信頼す可き通信員を、見出したり。『タイムズ』も彼の日本職員を知れども、彼が存在する間は、また如何ともす可からざりし也」（『国民新聞』1912年10月30日、p.1）
- ⁸² 英文翻訳については、大多起代子、坂元理人、鳥越衛二の各氏のご協力をいただいた。
- ⁸³ 「後背の山脈から広大な関東平野へ流れ出る利根川、荒川、相模川の河口に位置する江戸は、要塞建設のこれ以上はない場所であった」「1603年に徳川家康は江戸を帝国の行政の中心地とした」（*The Times* (Special on Japan) p.58）。以下、「」に注記のない引用は当該記事からのもの。
- ⁸⁴ 初拜謁の印象を『東京朝日新聞』に2度寄稿している。1909（明治42）年7月1日（朝刊p.5）「横浜懐古談」で、「そのとき陛下は御年わずかに十六。日本服で入せられた。それを拜謁の初めから終りまで衣物の襷一つも顔の筋一つも動かされなかつたので、我々は退出しても、全体よくあれまでに寂然自若としておられたものと怪しんだくらいです」。2度目は1912（大正元）年8月4日（朝刊p.6）「外人の観たる先帝」で、「陛下は瞬きの一つだに遊ばされず、一言の御語さへ下し賜わず（略）そのとき陛下の威儀端然たる御様子には皆々感嘆つかまつりまして、中には恐れ多くも人形にあらずやなど想像したものでございました」。
- ⁸⁵ 海軍省構文備考類。「第六類、太政類典・第二类・明治四～十年」国立公文書館所蔵。
- ⁸⁶ 「フランク・プリンクリーと明治時代」、『丸』第1巻第8号、聯合プレス社、1948年、pp.73-88。
- ⁸⁷ 高橋秀直『日清戦争への道』p.175、東京創元社、1995年。

- ⁶³ 伊藤博文の狙いは、「内乱の鎮圧という名目で清が朝鮮に軍事的影響力をふるうことの阻止」であった。「再派兵禁止は日本にも適用される以上、これにより日本の朝鮮への軍事的侵略も大きく制約されることになる」と考えた。そのため、「伊藤は、日本の侵略の余地をみずからほとんど閉ざすという手に出ようとしたのである」(『日清戦争への道』p.178)
- ⁶⁴ 『日清戦争への道』の著者、高橋秀直は(李総督の)再派兵権確保への執着により、日本の大陸国家化への道を封じる機会を結果として清は逃がしてしまっており、長期的に見れば重大な失策をこのとき犯したといえよう」(p.180)と見ており、それはやがて現実化する。天津条約締結の帰路、伊藤がプリンクリーに語った言葉通り、李総督は日清戦争の種をまいたことになった。
- ⁶⁵ 晩餐会に招かれたプリンクリーは隣席の伊藤博文に、かつて危険を感じることはなかったかとたずねた。伊藤は、「何事に限らず予の身は危険に曝されて居れり。昔は少し位は命も惜しかりしが、今日となりては余命幾何もなければ、國の為とあらば何時でも喜んで死なん。予の懸念する最後の問題は韓国なれば、それさえ片が付けば安心なり。と答えた」、『伊藤博文伝(全三卷)下巻(復刻)』(春猷公追頌会編)原書房、1970年、pp.863-4)
- ⁶⁶ 伊藤之雄『伊藤博文—近代日本を創った男』講談社、2015年。
- ⁶⁷ *The Japan Chronicle*, Oct. 30, 1912, p.5.
- ⁶⁸ 1912年10月29日, p.1.
- ⁶⁹ エレン・P・コナント(1995),【文献2】掲載。
- ⁷⁰ 「美術史家。シカゴ美術館でアジア美術を教え、現代日本陶器展、韓国現代美術展などを開催。欧米の日本美術コレクション、日本の国際博覧会への参加。明治時代、美術分野での活動や日本美術に対する関心を通して近代美術の発展に影響を及ぼした「お雇い外国人」に関する論文を多数発表」(同上, p.197)
- ⁷¹ 「フェノロサの没後、その功績には不相応なほどの名声を得、明治時代の日本美術の発展に対する現代人の理解を歪め、フェノロサほど狂信のかつ追従的な見解を持たなかった他の人々の役割を曖昧にする結果を招いてしまった」(同上, p.127)
- ⁷² *Japan: Described and Illustrated by the Japanese written: by eminent Japanese Authorities and Scholars/Edited by Captain. F. Brinkley*, Boston, (J・B・Millet co.), 1897.
- ⁷³ 「注4」参照。
- ⁷⁴ エレン・P・コナント(1995), p.133,【文献2】掲載。
- ⁷⁵ 河鍋楠美「暁斎の弟子プリンクリー」、『暁斎：河鍋暁斎研究誌(10)』河鍋暁斎記念美術館、1982年4月、pp.14-16。
- ⁷⁶ エレン・P・コナント(1995) p.137。同, p.149の註釈「47」には、「香港総督が日本政府および軍隊幹部を訪れた際、日本側は総督を貴賓として扱い、明治天皇自ら歓迎し、京都の迎賓館に宿泊させた」との特別待遇が記されている。【文献2】掲載。
- ⁷⁷ 白土の化粧かけや透明な鉛釉を用いる粘質の陶器。
- ⁷⁸ 東京・芝の増上寺、日光・東照宮。
- ⁷⁹ 横谷宗珉(1630-1733)。装剣金工師。因習の家影を離れ、自由な題材・構図の絵画風彫刻の町彫を創立し、片切彫を得意として一世を風靡。狩野探幽、英一蝶の下絵も現存。
- ⁸⁰ *The Times*, Oct. 29, 1912, p.9. *The Japan Chronicle*, Oct. 30, 1912, p.5.
- ⁸¹ 宣教師として来日し、明治10-20年代に『ジャパン・ガゼット(*The Japan Gazette*)』の主筆をつとめる。日本の英語教育にも貢献。のちに仙台高等学校の教授となる。「注18」pp.201-202参照。
- ⁸² *The Japan Weekly Mail*, Nov. 2, 1912, p.517.